

特集

聖学院の表現教育「アート」



## CONTENTS

### 01 &Talk [聖学院の表現教育-アート-]

05  
focus-聖学院の表現教育-アート-  
[聖学院小学校]

06  
focus-聖学院の表現教育-アート-  
[女子聖学院中学校・高等学校]

07  
focus-聖学院の表現教育-アート-  
[聖学院中学校・高等学校]

08  
focus-聖学院の表現教育-アート-  
[聖学院大学]

09  
在校生の活躍  
卒業生の活躍

11  
Seig NEWS

14  
Our Mission

15  
聖学院歴史探訪

家にいる時間が増えたことで、何か作り始めたという人も多いのではないのでしょうか？ 小学校の頃の図工を思い出して画用紙で工作を試みたり、絵を描いてみたり。クリエイティブなことを楽しめるというのは一つの才能であり、それを身につけているのは幸せなことだと思います。そしてその土壌はやはり教育にあります。

聖学院小学校では校舎全体を美術館に見立て、全校児童の作品を展示する図工の作品展を行っています。女子聖学院中学校・高等学校（以下女子聖学院中高）には美大をめざす生徒もいます。聖学院のアートというと、讃美歌を中心としたクリスマス礼拝や合唱、ハンドベルなど音楽の行事やサークルが有名ですが、このように図工や美術を愛する土壌も培われています。

## 聖学院の 表現教育

【アート】

# & Ta



### 北野 敦子

女子美術大学デザイン科卒業  
公立や私立中学高等学校の美術講師を経て、  
2011年より聖学院小学校に入職。現在は小学校  
3年・4年生の図工を担当。

## 小学校では校舎全体をつかった校内作品展を開催

**北野** 6年ほど前、新校舎になって階段がらせん形のような珍しい形になりました。その特性を生かして小さな美術館のような展示がしたい、というところから校舎全体を使った展示企画が始まりました。展示全体で森とか自然という大テーマを設け、その世界観に合う、より具体的な6つのテーマ(妖精や植物など)を作り作品展を構成しています。学年それぞれが1つずつのテーマに沿って作品を作るので一人ひとりの個性も大事にしつつ、全体としてのまとまりも出せていると思います。また、保護者の方に自分の子どもの作品だけではなく、他学年の作品、色々な成長の形を見ていただきたいという思いもありました。そのため順路のようなおすすめルートを作り、そのルートに沿って進

むと、全学年の児童の作品が見られるようにしています。聖学院小学校では、学年の違う1〜6年生までの6人でテーブルを囲むスクールランチという給食の時間があります※1。他学年にも友だちがいるので、その



聖学院小学校の校内作品展の様子。オープンスペースや階段などを展示スペースに活用。校舎全体を美術館に仕立てています。

※1 スクールランチは、現在コロナウイルス感染拡大防止のため中止しています。

**小学校の図工と中学校の美術。アートを義務教育として学ぶ期間は9年間。**

**その9年間は子どもたちにとってどういう時間なのか。**

**小学校の図工教育に関わっている北野先生、関先生、  
女子聖学院中学校・高等学校で美術の指導をされている渡邊先生に、  
聖学院の表現教育についてうかがいました。**



関 幸子

学芸大学初等教育学科美術専修卒業後、公立中学校で美術を指導。担任教諭として聖学院小学校に。育児のため一時休職し、公立小学校で特殊学級担任を経験。2006年から聖学院小学校勤務。



渡邊 しのぶ

女子聖学院中学校・高等学校美術科教諭。専門は陶磁器の色絵研究。現在、中学3年生の担任と学年主任を兼任中。

友だちの作品を見つけて親子で盛り上げられるのも聖学院ならではです。「うちの子と気が合うんだなと分かって、他の友だちの作品も見られてすごくよかった」というお言葉をいただいたこともあります。

**関** 授業でもクラス単位で作品展を見て回って、子どもたちが自分の気に入った作品を見つけたら各自iPadで撮影し紹介するということをしています。

## 図工や美術は楽しさ、自分らしさを知るための授業

**関** 普段から大きな教育目標を意識しているわけではありませんが、一つ思うことは、たとえ不得意でもとにかく図工や美術を「嫌い」にはならないで欲しいということです。得意な子どもでもクリエイティブな仕事に就くとは限りません。だから一生のうちのどこかで、ものづくりやアートを楽しめることの方が大事なと思っています。例えば、家具や食器の一つ選ぶにしても楽しんで選べれば人生は豊かになります。小学校では極力楽しみながら技術を身につけて、中学校に送り出してあげたいです。



「作品を通じて自分らしさ、みたいなものを見つけたいです。友だちにも『らしさ』があって、その『らしさ』をお互い大切に出来たら素晴らしいですね」と語る北野先生

**北野** 自分らしさみtainなものを見つける機会になると、より良いと思います。題材が同じでもまるっきり同じ作品はできませんよね。色を選ぶ事もそうですし、構図もそうですし、友だちと見比べたときに「自分らしさってこんな感じなのかな」と、ふんわりで良いので感じてもらえたら良いと思います。友だちにも『らしさ』があって、その『らしさ』をお互い大切に出来る、授業を通じてそういう基礎ができたなら素晴らしいですね。

**関** 私が子どもの頃の図工の授業は正解があって「こういう風に描かなければいけない」とか「ここまで仕上げなければいけない」という時代でした。それが徐々に北野先生が言ったようなそれぞれの個性を認めるという形に変わってきたと思います。

**渡邊** 確かに美術は苦手になりやすい教科ですね。中学では入学した時点ですでに「絵を描くのが苦手」という生徒が多いです。

**関** 小学1年生だと自分の絵がすべてじゃないですか。楽しんで描いて、どんな風に描いても皆がほめる。それが学年が上がってくると、技術が伴わなくなってきてめげるのかもしれませんが(笑)

**渡邊** 美術は人と答えが違っていることに、喜びと自信を持って良い唯一の教科だと思っています。ですから、中学1年生の授業では「違いを楽しもう」と教えます。例えば入学して最初に描く「つぶれた缶」では、まず缶を木槌で好みの形につぶしてから描かせます。こうすると隣

の人がたまたま同じ缶を持ってきて描いていても気にならず、絵に集中することができます。また評価は作品全体で判断するのではなく、色が金属のように見える表現ができていないか、ゆがんだ商品名が見えた通り描けているか、などの課題をクリアしていくことで加点しています。自分が描いたものに成績がつくというのは、生徒によっては辛いことですので、やり遂げられた部分をそれぞれ加点し評価しています。

## 美術を通して身に付く集中力

**渡邊** また、おしゃべりしながら描いた作品と、集中して描いた作品では明らかな差が出ます。それがどのくらいの差なのか、実際に体験する授業も行っています。例えば、つぶれた缶の周り一周の凹凸だけを見つめてゆっくり描くと、記憶にない形なので集中することができます。手本の絵を逆さまに見ながら描いたりもしています。しゃべりたくなる状態を不思議に思ったり、そんな自分を振り返り笑ったりしながら、できあがった鉛筆の線はしっかり太くなることも学びます。

**関** 集中力ってすごく大事ですよね。小学校の課題は、集中の持続時間が比較的短いことでしょうか。

**北野** はい、短いですね。

**関** そこには常に問題を感じています。今、コロナ対策で極力しゃべらないようにするチャンスだと思うところもあります。図工室に入った時に「密になるからしゃべらないで」と声をかけると、しばらく無言の時間が続きます。そこで「鉛筆の音しか聴こえないね」というと児童は「そうだね」と自分が集中していたことに気づきます。しかし、これが2時間続くか、と言うと…。

**北野** 続かないですね。長くて30分かな、という感じです。続いたら続いたですごく疲れてしまうみたいで、その後の授業の「記憶がない」とか言っている子もいるので(笑)

## 自粛期間と図工・美術

**渡邊** 緊急事態宣言の中、学校へ登校できない期間の宿題として中学生へ向け絵の下描きを課題に出したところ、ものすごく細かく丁寧に仕上げた生徒が多かったです。

**一同** へ～。

**渡邊** 受験を控える高校生にとって大変なその期間中、中学生とオンラインで面談をしたのですが、ほとんどの生徒が「今の状態は楽しい」と答え驚きました。「2週間一歩も外に出てませんが平気です」「自分はインドア派だから」「今まで土日でもクラブで忙しすぎた。こんなに心に余裕があるときはなかった」とポジティブにとらえていました。そして生徒たちは、家族の食事を含めいろいろと何かしら作っていると聞いていました。こういう状況になると、人は何かを作りたいのかなと仮説を立てたくなりました。思わず「うわ!」と声をあげるくらい丁寧に仕上げられた下描きの宿題も、この何かしら作る時間に丁寧に制作したのだと思われます。

**関** 小学校は終了式をしないでお休みに入ったので、絵具からクレヨンから全部学校にある状態だったんですね。その中で課題を出したらみんな家にあるもので思った以上に面白い作品を作ってきたんです。

いい作品ばかりなので学校のホームページに掲載しました。そうしたら、それを見た子どもたちがさらに張り切って作品を作り始めたんです。低学年のご家庭では親子合作という作品もありました。みんな作ることをとても楽しんでいるようでした。

ただ担任の先生の顔を描こうって言ったら、全員オンラインで見た先生の顔になってしまうかもしれません。目の前で話している先生、動いたり一緒に何かやる先生とはやっぱり違ったんじゃないかなって思います。特に小さい子どもたちが学校再開後に「うーん顔にはひげがあるねえ」とか「ひげはね鼻の下にも生えているんだよ」とか話しながら描いてのを見ると、友達と一緒に描くっていうのもすごく大事なんだなと思いました。

**渡邊** そういうのも大事ですね。またそれとは逆に教室でみんなできると「あ、私遅れてる」とかもありますよね（笑）。

**関** 焦りますよね。

**渡邊** 決められた時間に作り上げるという逆算しながらの行動も大事ですが、焦らない環境も大事ですね。

## 表現教育で大切にしていること

**渡邊** 頭の中のイメージを実際に描けたらうれしいことだと思います。その技術を生徒が身につければ、彼女たちは自由に個性を發揮できるようになると思うのです。「どこにもないからあきらめる」のではなく「どこにもないなら作る」、そのような人になってもらえることが理想です。

それにはやはり基礎が大事です。技を教わる中で、いろいろなやり方を経験して自分に合った方法を見つけてほしいです。義務教育が終わると、多くの生徒は美術を終了します。つまり中学の美術教諭は、生徒一人ひとりが美術を学ぶ最後の3年間を任されていることとなります。そのことを意識して教壇に立っています。



「課題解決型学習は、原因を見つける力、解決策を作る力、実行して達成する力を養うのが重要。美術では解決策を作るテクニックを与え、実行するプロセスを繰り返していきます」と語る渡邊先生

**北野** 私は、作ることに食わず嫌いにならず、とにかくやってみて欲しいです。苦手でもいいからやってみると意外と形ができることがありますし、味のある作品になることもあります。完璧を求めるより味のある作品の方が私は素敵だと思っています。それをわかって欲しくて「完璧じゃなくていいよ」というメッセージをいつも送り続けています。完璧じゃなくてもゼロからイチを作り出した経験はとても大事だと思います。

**関** 自分自身と自分自身が作り出したものを小学校のときは好きであってほしいです。たぶん小さいときって思い描いたものがいっぱいあって、上手く描けても描けなくてもどんどん描きたいものが湧き出てくるんだと思います。でも成長とともに上手く描けたかどうかという基

準が加わっちゃって、描きたいものとか作りたいものが乏しくなっています。それでも自分が生み出したものを好きでいてほしいと思っています。よく自分の小さい頃の絵を親が取っておいてくれることがありますよね。そういうのを後から見ると、自分の描いたものが好きだった頃を思い出せると思うんです。だから小学校時代の作品を、本人だけでなく、親子で大切にしてほしいです。それは自分が何かを大切にしたこと証になるんじゃないかと私は思います。



「小学校時代の作品を、本人だけでなく、親子で大切にしてほしい。それは自分が何かを大切にしたこと証になります」と語る関先生

**渡邊** 生徒一人ひとりの美術の作品を中1から中3まで取っておいて、中3の送別会にまとめて返すようにしています。なぜかという、一個一個返すと…。

**関** 捨てちゃうでしょ。だけど親がこっそり取っておいたり、写真に残したりしますよね。それで子どもが後から自分の作品が見たいと言って…。

**渡邊** そう、ちょっと距離を置くと懐かしくなるんですね。

**関** たぶん自分自身もそのときはそんなに思い入れはないっていうか、そんなにその作品が好きだったわけではないんでしょうけど。

**渡邊** 3年間の作品を1つのファイルにまとめてドーンと。

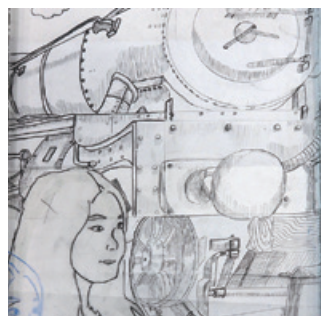
**関** でも先生取っておくって大変じゃないですか？

**渡邊** 倉庫がありますから。

**関** 取っておく先生の労力、エネルギーがすごい。

**渡邊** 義務教育ラストなので、ラストの3年間の記録です。

（取材日／2020年7月）



女子聖学院中高のオンライン授業期間中に課された下絵を描く課題。多くの生徒が時間をかけ、丁寧に課題を仕上げました。



聖学院小学校が再開された後にクラスみんなで描いた先生の絵。同じモチーフでもそれぞれの個性が光っています。

# focus\* ( 表現教育 )

【アート】



「校内作品展」の様子。校舎を美術館に見立てて全児童の作品を展示しています。



緊急事態宣言中に児童が各家庭にあるものを使った作品を小学校ウェブサイトで紹介しました。(上)1・2年生の作品で、深海を泳ぐイカとクラゲ。(下)5・6年生の作品で、ペイントした卵とイースターバニー。

## 人と違うことを大切にする図工教育

新しい時代に新しい教育を、という声が聞かれます。AIやIoTの発達により、仕事の在り方が変化されると言われる中で、「STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics)」にArtが加わり「STEAM」教育という言葉が使われるようになりました。唯一の正解がない社会にあって、正解を覚えるだけではなく創造する学びが求められています。

聖学院小学校では、「よく学ぶ よく遊ぶ よく祈る」を教育目標として掲げています。よく遊ぶことを通して自分の興味関心に気づき、学ぶことで賜物を磨き、祈りの中で人に仕えていくのです。そのためには「自分の個性」と出会うことが大切です。表現教育は、その個性と出会う機会となります。

表現教育の一つに、図工があります。この教科では、旧校舎時代から「人と違うことを喜んで良い」という考え方を大切にしてきました。一つのテーマに向かって作品を作る場合でも、表現方法は様々であり、プロセスも異なります。先生はすぐに課題解決のための方法を教えるのではなく、一緒に悩みながら寄り添います。やがて子どもたちは、自分たちで答えを見つける喜びを見出してゆくのです。

小学校で40年以上続いている行事に「校内作品展」があります。学年ごとに作品テーマが与えられ、毎年10月に校内で展示します。2015年に新校舎が与えられてからは、校舎を1つの美術館に見立てるコンセプトを取り入れました。観覧者は順路に従って進むと、自分の子どもの作品だけでなく、学年ごとに異なる表現方法やその成長を楽しむことができます。多様でありながら、不思議な一体感に出会う展示には、「自分の個性を好きになって欲しい」という先生の願いが込められています。

## 聖学院小学校

### 図工教育



#### 東京私立小学校児童作品展

2020年1月29日～2月3日に松屋銀座にて開催された東京私立小学校児童作品展、通称「ほら、できたよ」。聖学院小学校展示スペースの様子。2019年度テーマは「森の音楽会」でした。

# 女子聖学院 中学校・高等学校

## 美術教育



### クリスマスツリーオーナメント

ホワイトエに展示されるクリスマスツリーを飾るクッキーのオーナメントとオブジェは、女子聖学院の美術部が制作しています。

## 課題を通じて基礎を学び、表現を解放する

人と答えが同じでない事に不安ではなく自信と喜びを感じて良い唯一の教科が「美術」。

女子聖学院中高の美術教育が掲げるコンセプトです。それを実践しているのが渡邊しのぶ教諭と栗原知伽講師(写真)の二人の先生。

美術の授業では、1年間に5～6点の作品に取り組みます。それぞれの課題には意図や意味があります。中1の最初には「つぶれた缶」の絵を描きます。缶をつぶす理由は、きれいな形の缶を描かねばならないという考えを取り去り、人と比較せず自分の絵に集中するためです。また、記憶に頼らずしっかりと対象を観察することができます。中1で雑誌『タイム』の表紙になった自分を想像して「横顔の自画像」を描きます。タイム誌の表紙になるくらい偉業を成した自分、その状況を想像することもクリエイティブな学び。中2では「名画の模写」をします。制作のコンセプトは名画の構図を学ぶことです。モネやゴッホなど自分の好きな絵をモチーフにして模写を描き、できあがった作品を飾るダンボールの額縁を制作します。中3では中学での学びの集大成として「4分の3正面を向いた自画像」を描きます。高校の選択科目「美術」と「工芸」は栗原先生、渡邊先生が分担し担当しています。実は中学の美術の時間でも生徒は螺鈿らでんや堆朱ついしゅなどの工芸の作品を作っています。工芸が美術と違う点は「機能」が必須なところ。機能と美を追求し「意匠」を学びます。

「観察」「構図」「道具の使い方」などを、中学でしっかり学ぶので、高校では基礎があることを前提に応用の授業が進められます。すべての生徒が等しく基礎を学んでいることは中高一貫校ならではの強み。「基礎的な技術にさらに応用や工夫を加え、自分が表現したいことをより理想的に実現させていけます。」と栗原先生は言います。



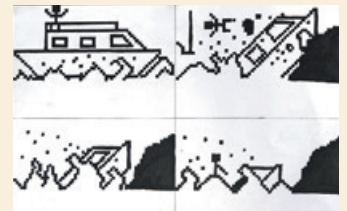
(上)中学の授業で制作した工芸の作品、螺鈿(らでん)。  
(下)北区文化振興財団のココキタ「カフェばれっと」。女子聖学院美術部生徒によって描かれた黒板アート。



中2「名画の模写」。手作りのダンボールの額で額装します。



細いペンを使い、ていねいに線や模様を描くドローイング作品。



(上)様々な色の顔料からつくる卵テンペラ  
絵具。  
(下)中2生徒の作品。手描きのドットで描く  
4コマアニメーション。

# 聖学院 中学校・高等学校

美術とキリスト教



## タイ研修旅行でTシャツ作り

渡航前に現地の子もたちが描いた絵を送ってもらい、日本で生徒たちがデザインをして版にしました。それをタイの村に持っていき、子どもたちと一緒にシルクスクリーンで印刷してTシャツを作りました。

## 作品作りを通しての自己確認

聖学院中高の美術は1学期に1作品仕上げるペースでじっくり時間をかけて創作活動に浸ります。作品作りを生徒たちが自己確認する時間にしたいと聖学院中高、美術科主任の伊藤隆之先生(写真)は言います。

「自分にとって絵を描くことは、礼拝と同じようにルーティンでもあり、自分の時間を捧げる大切な時間でもあります。キリスト教は多くの芸術に影響を与えていますが、自己を確認するという文脈においても宗教とアートとの親和性は高いと思います。

また、自分が自分であることを認識するには、常に身のまわりの存在とのコミュニケーションが不可欠です。そう考えると自己の表現である作品は、自己と他者をつなぐためのメディアであると言えます。小学校までの「図工」では、本人が楽しく創作できることが何よりですが、中学校からの「美術」に他者のことを考える視点、つまり客観性が必要となるのは、作品を通して何かを伝えるメディアの役割が加わるからです。」

また、美術には「見えないところを見ていく力」を育む力があると言います。ものづくりのプロセスにおいて、絵の具や彫刻刀などを使って、イメージを具現化していきます。その試行錯誤の繰り返しによって、想像力や、仮説を立てたり推測したりする力、すなわち思考力が培われていきます。

絵画材料の研究を専門とする伊藤先生に影響を与えた、「ヴィーナスの誕生」で有名なポッティチェリというテンペラ画の画家がいます。テンペラ画で使われるテンペラ絵の具は卵などの乳化作用を固着剤として利用します。油絵の具の技術の発展によって15世紀くらいから主流が変わっていくのですが、このようにテンペラにフォーカスしただけでも、美術は化学や歴史、哲学や宗教学などにつながり、学びはどんどん深まっていきます。



# 聖学院大学

## 造形表現基礎



### 課題「1枚の紙から」

本文でも紹介した、1枚の紙を蝶に見立てて子どもたちが何をしたいか展開を考える課題です。中には、1匹では寂しいからと自らが蝶になる学生も。「教室の授業ではここまでの発展は難しかったかもしれない」と柴崎裕先生。

## プロセスの中の創造性に焦点を当てる「造形遊び」

小学校の図工に、遊びを通して創造性を身につける「造形遊び」というものがあります。小学校の学習指導要領でこの「造形遊び」は、絵や工作に並んで大切な教育内容に位置づけられているものです。作品を作ることが目的ではない不思議な「遊びの授業」は、子どもたちの興味と関心呼び起こそうとする大切な授業になります。

聖学院大学には「造形表現基礎」という授業があります。保育士、幼稚園・小学校教員を目指す学生が「子どもの造形活動」を学ぶ授業です。授業を進めるのは東京都の小学校で専科として30数年図工を教えてきた柴崎裕先生。現在授業はオンラインで行われています。二つに折った紙をヒラヒラ動かして「蝶」に見立て、どのように子どもたちの造形活動に導くか、また発展させるかを考えたり、水を使って遊び、その遊びを写真に撮ってコメントと共に提出する課題に取り組んでいます。水遊びの課題はまさに「造形遊び」への挑戦であり、子どもの世界に近づく実験です。中には「遊び」を「学び」へとつなげる逆説に悩む学生もいるようです。

「遊びのプロセスの中にこそ、個性と創造性があります。砂場遊びが分かりやすい例で最後は崩れてしまうかもしれませんが、作っている過程に子どもたちの生き生きとした創造性が発揮されています。出来上がった作品で評価することに縛られている教育観を、作品を作らなくていいんだと開き直って解放するための授業です」と語る柴崎先生。

実際、課題に悩んだ学生も最後には「身近な水でも試してみると楽しめる。今回の課題で行き詰まったら遊んでみるのも悪くないと思った」と書いていて、柴崎先生が意図するところに到達した様子が垣間見られます。

また、学生のコメントの中には「本来の図工の時間では、友だちに手伝ってもらったり、何気なく意見交換していることが多いと思う。この課題をグループでできたら面白いだろうと思った」という意見もありました。教室という空間を超えて広がる表現の可能性と、教室の中でこそ生まれるコミュニケーションの豊かさ。コロナ禍のオンライン授業のなかで、その両面への気づきは、これから教員になる上でとても大切な経験となるに違いありません。



(上) 柴崎先生。美術館の中だけでなく、生活の中にこそアートがある。そういう気づきを授業の中で学生に伝えたいと語られていました。

(下) 水遊びの課題では「久しぶりに地面が水のおいになるのをかいた」というコメントもあり、五感でも子どもの心に近づくことができました。



水風船を割った瞬間。子どもの頃に見た水風船の破裂の瞬間、その興奮を彷彿とさせる一枚です。



## 高瀬 皓大

活躍ファイル \*No.16

聖学院高等学校 2年  
記念祭副委員長



## 川原 康子

活躍ファイル \*No.17

聖学院小学校 1992年卒業  
女子聖学院中学校 1995年卒業  
Groove845 グラフィックデザイナー

# カメラやメディアを駆使して 人や社会に貢献

## 在校生の活躍

「前から人の役に立つことが好きでした」と語るのは高瀬<sup>こうだい</sup>皓大さん。聖学院中高と女子聖学院中高合同で行われているパラスポーツ応援プロジェクトに参加して、カメラマンとしても活躍しています。パラスポーツは知っているけれど試合を見たことがないという人が多いのではないのでしょうか。パラスポーツの魅力を伝え、もっと多くの人に親しんでもらうための取り組みがパラスポーツ応援プロジェクトです。

フォトメディア探究部に所属していた高瀬さんがこのプロジェクトに参加したのは顧問の児浦先生から「パラスポーツ応援プロジェクトという活動があるから撮影に来てみたい?」と誘われたのがきっかけでした。参加してみるとパラスポーツの魅力もさることながら、参加している他のメンバーの熱意に衝撃を受けたと言います。「プロジェクトでは女子校と男子校のメンバーがパラスポーツを広めるという一つの目標に向かって意見をぶつけ合っていました。世界に目を向けて本気で活動している、その空気感がとても素晴らしいと思いました」以来、写真とSNSなどメディアを駆使してこの活動を後押ししています。高瀬さんは現在、オンライン開催となる記念祭を成功に導くため委員活動にも動んでいます。過去にはSDGsムービーコンテストにも動画を出品、高校1年生の時には「高校カンボジアMoG」にも参加。現地の女性雇用を促進する社会起業家の元で課題解決に取り組んできました。人や社会に貢献する活動に次々取り組んでいく高瀬さん、将来の活躍が楽しみです。

(取材日/2020年8月)

# 恩師が後押ししてくれた デザイナーへの道

## 卒業生の活躍

女子聖学院の卒業生は多方面で活躍していますが、美大へ進学してデザイン業界で活躍している人もいます。川原さんはその一人で、現在、フリーランスとして広告デザインやインフォグラフィックス\*を中心に活躍されています。

小学校の頃から図工が大好きで、中学でも美術は一番好きな授業だったそうです。きれいにレタリングされた当時の作品には、すでにグラフィックデザイナーの才能が顕れていました。中学時代は生徒会長を務め、学校をより良くしようと意欲的に活動する一面も持ち合わせていたようです。そんな川原さんがグラフィックデザインに触れたのは自分が好きな雑誌を切り抜いて箱に貼っていくコラージュボックスを作る課題でした。それ以来好きなチラシやフリーペーパーをスクラップするようになり、次第にチラシや雑誌をデザインしたいと思うようになったそうです。

川原さんが当時から深く信頼を寄せていたのは美術科の渡邊しのぶ先生。中学3年の時の担任だったこともあり、いろいろ相談していました。美術の道へ進むことを後押ししてくれたのも渡邊先生でした。川原さんはその頃を振り返り「しのぶ先生に美術を教わっていなかったら、今こういう仕事はしていなかったと思います」と語っています。

美大では情報デザインを専攻した川原さん。最近では経済産業省のレジ袋削減キャンペーンのポスターやバナーを手掛けています。そして大手コンビニでは7月末現在、7割以上の方がレジ袋を辞退しているという検証結果を耳にします。女子聖学院でスタートした川原さんのデザインが、今社会貢献の一端を担っています。

(取材日/2020年7月)



川原さんがデザインした、レジ袋削減キャンペーンのバナー。コンビニで掲示されています。

\* インフォグラフィックスとはアイコンなどを用いて情報やデータを視覚的に表現したものを。

まだまだあります!

# Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も  
次のステップへと  
日々新しい試みをしています。

学校法人聖学院

## 聖学院SDGsコンテスト PHOTO & MOVIE 「ワタシが見つけたエコロジー」

### 写真&動画を募集

学校法人聖学院は、9月14日(月)よりSDGs(持続可能な開発目標)に関するフォトコンテストの作品募集を開始いたしました。本コンテストはSDGsをコンセプトにした作品を聖学院の関係者から幅広く募集するフォトコンテストで、今年度が初開催となります。今年度のテーマは「ワタシが見つけたエコロジー」で、自然や環境に影響を与えていると感じるシーンや風景やSDGsの各ゴールと関わりのある写真または動画を募集します。なお本コンテストは、応募先着100名様にオリジナルSDGsバッジ(木製・糸魚川産)を、受賞者には「賞状」及び「記念品」を贈呈します。応募受付は10月14日(水)まで。詳細は法人ホームページ(<https://www.seig.ac.jp/news/topics/5230/>)をご覧ください。

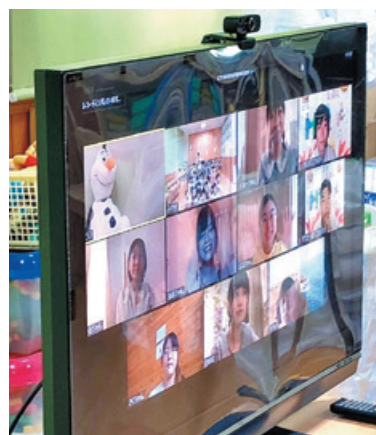


聖学院大学



## オンラインで子どもとつながる ボランティアを展開

新型コロナウイルスの関係で子どもと直接関わるボランティアができなくなった大学生たちが子どもたちと関わる方法を模索した結果、オンラインで交流するというプログラムができました。ボランティア活動支援センターのバックアップのもと、学生たちは仲間と共にオンラインで何回も練習を重ね、様々なレクリエーションを準備しました。8月24日(月)の笹久保さくら保育園(鶴ヶ島市)との交流会では宝探しやオリジナル絵本の読み聞かせが好評で、「また遊ぼう」と言ってくれる子がいるほど大盛況でした。翌日25日(火)の認定NPO法人彩の子ネットワーク(上尾市)との交流会では9組の親子とオンラインでつながり、留学生がベトナムと中国の手遊び歌を教えてください、ペープサートを使うなど工夫し、楽しい時間を過ごしました。



聖学院大学



## 今年はオンラインで開催 釜石スタディツアー

聖学院大学ボランティア活動支援センターと復興支援ボランティアチームSAVEの主催による釜石でのスタディツアー、今年は8月29日(土)と30日(日)にオンラインで開催しました。SAVEのメンバーは、Googleストリートビューの機能を活用して釜石の名所を紹介し、クイズを盛り込んで現地のお土産をYouTuberのように紹介するなど、オンラインの強みを活かした工夫を凝らした演出で参加者を楽しませてくれました。宝来館の岩崎昭子女将、高橋和義牧師のお話もうかがい、参加した学生からは「釜石や災害のことだけでなく、現在のボランティアの在り方や必要性・可能性について考えることができた。」との感想がありました。学生、教職員、31名が参加、1年生も8名が参加し、有意義な時間を過ごしました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。

※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

## 聖学院中学校・高等学校



### タイ研修旅行30回目の軌跡 生徒体験レポート集『十年間の最初の日』発行

2019年12月で30回目となる「タイ研修旅行」に参加した中3～高2まで32名の生徒が、各自の体験を元に3,000字のレポートを作成。2019年度は更に「自分ゴト化」を深めるため、生徒自身の身近な興味や関心を入り口とし、社会課題という大きなテーマに結びつけるアプローチを採用。結果として、前年の傾向に加えて「幸福」をテーマに選ぶ生徒が増加し、約200ページに及ぶ冊子が完成しました。現地に生きる人々の笑顔や暮らしに触れた生徒たちは、特定の国の「社会課題」を考えるというフレームを超えて、社会課題の中で希求する幸福のあり方を問いました。本レポート集販売（300冊限定）の売上は、タイ関係施設に寄付されます。（購入に関する問い合わせ先：聖学院中学校・高等学校／伊藤 豊TEL:03-3917-1121）



## 聖学院中学校・高等学校



### 2021年度新設 「Global Innovation Class」 WEBサイト、リーフレット完成

2021年度より、高校クラス「Global Innovation Class」を新設します。新クラスでは「ものづくり ことづくりを通して世界に貢献する」がコンセプト。海外大学進学や海外留学など、世界を視野に入れてグローバルスキルを身につけることができます。またそれに伴い、新クラスのWEBサイト、リーフレットが完成しました。時間割例やプロジェクト内容などがまとめられています。新クラスは次世代聖学院中高の象徴的なクラスになると確信しています。



## 女子聖学院中学校・高等学校



### パラ活動をオンラインにて発表 ～すべての人が共存できる社会に向けて～

8月7日（金）、慶応義塾大学総合政策学部の塩田琴美准教授研究会（ゼミ）にて、パラスポーツ応援プロジェクト健康福祉部門メンバーが「すべての人が共存できる社会に向けて」と題して、これまでの活動をオンラインで発表しました。塩田ゼミは「スポーツと障害者の社会問題」について研究しています。今回の発表は、女子聖学院中高と聖学院中高のパラスポーツ応援プロジェクトの活動を知っていただく良い機会となりました。



## 女子聖学院中学校・高等学校



### 女子校トークセッション 「三校で考える特色ある女子教育！」へ参加

8月27日(木)、『中学受験スタディ』が公式YouTubeチャンネルでライブ配信した女子校3校でのトークセッションに女子聖学院中高が参加しました。トークセッションではコロナ禍におけるそれぞれの学校のオンラインの取り組みなどを紹介。生徒もオンラインで参加をし、各校を志望校として選択した理由や、生徒目線での学校の魅力などが語られました。女子聖学院では運動会や記念祭などの生徒の主体的な活動と学びが紹介され、参加した佐々木先生は「生徒を信頼することが何より大切」とコメントしました。後半は先生から先生への質問でそれぞれの学校の個性ある取り組みにトークセッションは大いに盛り上がりました。



## 聖学院小学校



### オンライン学校説明会

9月3日(木)に聖学院小学校では今年度2回目となるオンラインでの学校説明会を開催しました。入学を希望するご家庭の方々に向けて、校長の話、聖学院小学校の教育について、今年度の入試について、という3部構成で説明をしました。

校長からは聖学院小学校が日々の教育活動において大切にしていることについて、入学希望の方々にご理解いただけるよう丁寧に説明いたしました。8月29日(土)に学校見学会が行われましたが、その学校見学会の順路に合わせた動画も観ていただきながら、校舎の様子や学習活動について紹介をしました。学校見学会に参加できなかったご家庭も実際に校内を巡ったような思いで聖学院小学校のよさを感じていただけたことでしょうか。



## 聖学院幼稚園



### 入園説明会開催

9月5日(土)に聖学院幼稚園では入園説明会を開催しました。園の保育方針について、園生活について、そして入園試験についての説明がなされ、最後に園舎内や園庭を見学いただきました。

聖学院幼稚園では、子どもたちが個性、才能、知識、技能を自分の幸せのためだけでなく、他者のために喜んで用いる人になれるよう、隣人を愛する心を育てる保育を行っています。園の保育方針の柱としてこのことが園長から語られました。ご参加いただいた多くの保護者の方々には、熱心に耳を傾けてくださっていました。



# Our Mission

（大学キャンパス）  
聖学院大学  
入試・広報課



入試・広報課は聖学院大学の学生募集と広報の2つの業務を担っている部署です。学生募集においては、高校訪問や日本語学校訪問、外部の合同ガイダンスへの参加、オープンキャンパスの実施などを行なっています。最終的に本学を受験をしてもらい入学者を確保することが目標です。広報業務では、大学のブランディングに関わること、各種マスメディア対策に関すること、大学ウェブサイト等をはじめとした情報発信や管理に関することなど多岐に渡っています。昨年まではオープンキャンパスで体験できた「大学の雰囲気」や「在学生の様子」が、受験生にとって本学入学を決める大きな要素でした。しかし今年はコロナの影響でオープンキャンパスの参加組数を最小限にしました。そのため、オンラインを含めイベントで提供するコンテンツの質や参加者一人ひとりの満足度を上げていくことがより重要になっています。

やりがいを感じるのは定員数を上回る入学者を確保した時です。また学生が出身校で「聖学院大学に入学して良かった」と話してくれることがあります。その様子を高校訪問の際にうかがうと誇りに思います。広報の面では、本学の魅力や取り組みについて評価いただいたり、取材や問い合わせが入ったりメディア等で取り上げてもらったり、共感していただき募集に繋がるなど、ステークホルダーとの信頼関係が構築できた際に達成感を感じます。

以前それぞれ独立していた「アドミッション課」と「広報課」が一つとなり、今年から入試・広報課になりました。課員全員が「募集」と「広報」それぞれの側面を持って日々の業務に携わっていくことで、新しい入試・広報課が確立されていくことを目指しています。

（取材日/2020年8月）

## Our Mission

1. 聖学院大学の理念や雰囲気を伝え受験生を募る
2. 聖学院大学のミッションやビジョンに共感するファン・サポーターを増やす
3. 多様な受験生のニーズに応え、入学前から入学後の学びへのサポートを行う



### ●STAFF

磯田和久・野沢由美子・松崎綾子・  
扇澤太一・秋山育美・神吉菜々子・  
五十部睦子・斉藤優輝・沼田朋子

### ●オフィス

大学ディサイブル館 IF

# 聖学院歴史探訪

## #10 聖学院教育 の歴史

- 全的な献身と高い知見 -



「最初の校舎と寄宿舎」(出典:<https://www.seig.ac.jp/about/history/>)

「なぜ、神学教育は高等教育への上昇志向を持つのでしょうか。それは、神と人にとに仕えるには可能なかぎり広い視野・深い思索・高い志操・鋭い識別力を有することが望まれるからです。歴史的に言っても、欧米の高等教育はまず神学と医学・法学から始まりました。現在でも以上の三学部は大学院レベルの教育です。わが聖学院の創設者たちはいずれも、この必要を十分に認識しており、当初から少なくともカレッジ・レベルの教育を企図していたのです。女子聖学院ではすでに大正年間に神学部と共にカレッジ・レベルの家政学部と音楽学部が試みられています。これらの高い理想は財政難のために数年で挫折していますが、初期の指導者たちが高等教育をどれほど施したいと考えていたかの、これはあかしてありましよう。わが聖学院の建学の精神には神への全的な献身と共に、こうした広く高い知見を求めようとする志が含まれているのであります。」

(次号に続く)

出典:聖学院キリスト教センター編「聖学院の精神と歴史」聖学院ゼネラル・サービス,2006年版より抜粋

## 学校法人 聖学院

理事長/清水 正之 院長/山口 博  
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351  
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail [pr\\_h@seigakuin-univ.ac.jp](mailto:pr_h@seigakuin-univ.ac.jp)

### ■さいたま上尾キャンパス

#### 聖学院大学

・政治経済学部/政治経済学科  
・人文学部/欧米文化学科 日本文化学科 児童学科  
・心理福祉学部/心理福祉学科  
学長/清水 正之 創立/1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

#### 聖学院大学大学院

政治政策学研究所/文化総合学研究所/心理福祉学研究所  
創立/1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

#### 聖学院みどり幼稚園

園長/山川 秀人 創立/1978年  
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

### ■駒込キャンパス

#### 聖学院 中学校 高等学校

校長/角田 秀明 創立/1906年  
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

#### 女子聖学院 中学校 高等学校

校長/山口 博 創立/1905年  
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

#### 聖学院小学校

校長/佐藤 慎 創立/1960年  
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

#### 聖学院幼稚園

園長/佐藤 慎 創立/1912年  
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

### ●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード (VISA、MasterCard) をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



### 住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530 (月~金 9:00~17:30)

